『九州産業大学国際文化部紀要』，第85号，57-71，2025
Journal of the Faculty of International Studies of Culture No.85, 57-71, 2025

【論文】

「母」なる役割の意義

―*Seraph on the Suwanee*におけるArvayの自己承認の試み―

志　水　智　子

序

Zora Neale Hurstonの最後の小説*Seraph on the Suwanee*（1948）は、Hurstonのそれまでの作品とは違って人種差別意識と劣等意識を持ち合わせた貧乏白人をヒロインとし、その結婚生活の中でのある開眼を描いている。発売当初は読者からの評判は悪くなかった作品ではあるが、Hurstonが10歳の少年に対するわいせつ容疑で告発されるというトラブルのせいで店頭から姿を消すという憂き目にもあった。この作品の白人主人公という設定自体はHurstonが友人Mrjorie Kinnan Rawlingsの成功に刺激を受けてハリウッド映画化を目指したためであり、[1] また一方では人種性にこだわらず人生の問題を扱おうとするHurstonの価値観が窺えるものである。HurstonはTracy Katherine L'engleに宛てた手紙の中では、"I think that my new book has both play and movie possibilities. I would love to see these Negro parts played by good white actors."（*Letters* 540）と述べている。またStephanie Liはこの作品の商業的成功にかけるHurstonの野心を、"Hurston's interest in describing the marriage of Arvay and Jim Meserve, the main characters in Seraph on the Suwanee, may have been a bit more calculating. Hazel Carby suggests that Hurston wrote the novel in order to establish a relationship with Metro-Goldwyn-Mayer Pictures . . . ."（Li 152）と説明している。この商業的目的のため、*Seraph on the Suwanee*は、Hurstonが黒人文化や黒人の生き方に対する探求心を放棄したのかどうか、また保守的な性役割にとらわれる男女観や結婚観を持つに至ったのかどうかについて、議論の多い作品である。[2] この作品において、性差別的な考えは持つが家族に対する責任感が強くて行動的でよく働く夫Jimとの結婚生活を続けるために、ヒロインArvayはJimの望む妻たる役割を引き受け、実際的には保守的な性役割にとどまるだけであるかのようにも読める。しかし最終場面において、大西洋の水平線（"horizon" 352）から昇る太陽を眺めるArvayのすがすがしい気持ちは、人生の"horizon"を広げ、経験と自立した人生観を身に付けていく、*Their Eyes Were Watching God*

におけるヒロインJanieの最後の場面での心境に類似する。するとこれら二つの作品は対照的なようでいて、共通するモチーフでつながっていると考えられる。Eva Lennox Birchも "In some ways her[Arvay's] situation is a development of Janie Crawford's, and in others the opposite."（Birch 83）と述べ、両作品の連続性と対比性を指摘している。

この作品においては、「結婚による幸福」というシニフィエに対して異なる意義を求める男女が長く一緒に生きていくことの困難さ、一人ではなく二人で幸福の "fulness" を達成しようとすることの困難さという普遍的なテーマが特に追究されていると考えられる。Hemenwayは、"The fascinating thing about Arvay's characterization is that Hurston created it from the inadequacy she found in the men in her own life, transferring the feelings of inferiority she found in them to the wife of her novel."（Hemenway 312）と指摘するが、Arvay の苦難もArvayの属性である劣等感の強さもHurstonが実際のパートナーに対して感じた困難を表象していると考えられる。また、*Their Eyes Were Watching God* におけるJanieの結婚生活の苦難にはHurstonとアルバート・プライス３世（A・W・P）の結婚生活の経験が色濃く投影されているということについて、Hurston自身が "The plot was far from the circumstances, but I tried to embalm all the tenderness of my passion for him（A・W・P）in *Their Eyes Were Watching God*."（*Dust Track* 750）と述べている。だがHurstonとA・W・Pとの関係は、Janieとその二番目の夫Jodyだけでなく、*Seraph on the Suwanee* におけるArvayとJimの関係にも共通して影響を与えていることが読み取れる。２組の夫婦はともに20年の結婚生活を続け、JanieとArvayはともに夫に対する苦悩を抱える。Hurstonがパートナーに25セントを貸そうとして厄介な思いをした経験は次のように記される。彼の主張は、"He was a man! No woman on earth could either lend him nor give him a cent. If a man could not do for a woman, what good was he on earth? His great desire was to do for me. Please let him be a *man*!" と描かれ、彼がH urstonからの援助を侮辱ととり、"man"（男らしさ）にふさわしいと考える性役割にとらわれる。彼がHurstonとの結婚において求めた妻のあり方は、"You know, Zora, you've got a real man on your hand. You've got somebody to do for you. I'm tired of seeing you work so hard. I wouldn't want *my* wife to do anything but look after me. Be home looking like Skookums when I got here."（746）と表現され、この価値観はそのまま、自分を愛して世話をし、自分と寝て、経済的な心配などせずに自分の首根っこにしがみついてさえいればよいというJimの性格形成やArvayに対する要求に投影されるのである。Hurstonは、価値観が合わないパートナーとの生活を、"We were alternately the happiest people in the world, and the most miserable."（*Dust Tracks* 749）と述べているが、このような浮き沈

みする気持ちは、ArvayがJimに対して、苦しみや憎しみ、喜びや誇りといった気持ちを交互に次々に抱く様子を彷彿とさせる。解決することのないパートナーとの関係をモチーフとすることにおいて２作品は共通し、Hurstonの文学的テーマはこの作品において突如変化したわけではなく、連続し、発展していったと考えられるのである。[3]

Arvayが苦難の最後に、夫の「母」的な役割を引き受け、母性愛による包容力で夫の価値観や要求を受け入れるという決意をすることは、性役割にとらわれ支配的な夫と結婚生活を続けるための一つの妥協案が提示されていると読むことができるが、これはどれほど有効な解決策であるだろうか。*Their Eyes Were Watching God*におけるJanieが夫を失った直後でありながらすでに新たな異性と巡り合う途上であることが示されるように、あるいは*Moses, the Man of the Mountain*の結末でMosesが自分のルーツを求める新たな旅に出発するように、Arvayも夫との結婚生活において自己承認を試みる逡巡の途上にある旅人であると考えられる。実際には自分を経済的にも精神的にも左右するJimを、逆に母のように包み込んで愛そうとすることは、自己承認のための一つの詭弁であり自己暗示と読めなくもない。本稿ではArvayが「母」なる役割を夫に対して果たすことの意味とその有効性について論じ、Arvayが試みる自己解放やJimとの関係性の特徴について考察していきたい。

Ⅰ　「母」になるArvayと「母」になることのないJanie

この作品の結末におけるArvayの生き方の選択が、父権主義と性差別に屈したかのような印象を与える一つの原因は、それが*Their Eyes Were Watching God*のJanieが一人で人生に立ち向かう結末と対照をなしていることである。ArvayとJanieの対照性と類似性を考察することで、２つの作品において他者との関係における自己承認の手段が探求され続け、描かれ続けていることが読み取れる。

この作品のタイトルにあるseraphがArvayを表わすのであれば、ArvayはGodにあたる夫Jimを常にたたえる天使にたとえられ、対してJanieはフードゥーの女神Erzulie Fredaを思わせる。Erzulie Fredaは、愛をつかさどり、多数の夫を持つが子どもをもたない若い女性の姿をした女神で、ムラートである。これらのたとえは、Arvayは夫に「仕える」という立場で最高の地位を得ることができ、Janieは能動的に愛情による幸福を創出するという側面を象徴するかのようだ。２人の性質の違いをみるとArvayに与えられた限られた視野が読み取れる。ArvayはHurstonが苦手とする劣等感にとらわれた人間であると共に人種差別意識も持ち合わせたプアホワイトであるのに対し、Janieは肌の色の薄い混血黒人でありながら人種のヒエラ

ルキーにおける優位性などにはとらわれない。Arvayが宗教活動に熱心で桑の木の下でのレイプに象徴されるように性的に受け身であるのに対し、Janieは梨の木の下での空想に象徴されるように能動的で官能的に異性を求める。またArvayは一度も自分で稼ぎを得ることはなく家族の世話をし、食事を作ることを役割ととらえる。Jimの好物の「じゃかいもパン」をはじめ、Arvayが作る料理が詳しく描かれ続けることは、Arvayの労働が家庭内に限られることを強調する。それに対してJanieの方は常に働き続け、特に三番目の夫Tea Cakeとはともに同じ肉体労働をする。ArvayはJimのエビ漁の船にともに乗ってJimの仕事の過酷さを体験することはあるがそこでも同じ仕事をすることはなく、彼女ができるのは夫のために料理をすることと共に寝ることのみである。Arvayはこのように限られた条件下で自己承認の方法を模索するのである。

JanieではなくArvayだけが経験することが「母」になるということであるのだが、この経験はArvayだけに一つの自己承認の方法を示唆するとともに、２人に共通する孤独をも示す。志水論文（2022）で指摘しているように、Janieは３回結婚をするも一度も「母」なることはなく、対してArvayの方は３人の子どもに対して思いを抱く「母」であり続ける。「母」となることでArvayは子供たちと自分が同じ資質を共有していることに気づくことができ、このことが彼女に限られた条件下での自己承認のためのヒントをもたらしてはいる。しかし、Arvayは最初の二人の子供を産んだ時には、彼らがJimにとって望ましい子供ではないかもしれないとの気持ちから自己評価を下げてしまう。また、長子Earlの障害と死、生きている子供たちの成長と子離れは、Arvayに寂しさをもたらす。またArvayはJanieと違い実の母がいるが作品中で描かれるのは母の死と母と共有した家の焼却の場面である。母とArvayも、Arvayと子供たちも、互いに相手を制御することができない関係であり、母と子の関係を持ってはいてもArvayは家系の縦のつながりにおいて孤独を抱える。Janieの方は祖母が強くすすめた結婚の破綻と祖母の死、実母の失踪によって実質的に家系を縦に下って共有する絆を持たない。このためJanieが自己承認を得る対象は親でも子でもなく、他者であり異性である結婚相手となるのである。そして母子の関係の喪失を感じたArvayは結局、Janieと同じように、夫との関係において自分の幸せを見出そうとし、２人は「母」になることとならないことにかかわりなく、母系のつながりにおける孤独を共有している。

また夫との関係において２人はいずれも自己の抑圧を経験する。Hurstonの作品において「語ること」は、イートンヴィルの店に集まってほら話をする人々の楽しみとしてまた、*Jonah's Gourd Vine*のJohnの才能がそうであるように人間の自己実現の手段として描かれている。娘時代にCarlに失恋したArvay自分の人生を神への奉仕にささげようとし、教会活動

に勤しむが、この頃のArvayには人々の心を動かすスピーチの才能がある。この様子は、“Arvay's tearful speech followed the usual pattern, and everybody said it was just fine.”(5)と描かれる。だが“the gift of gab”(8)を持つ、裕福でハンサムで精力的なJimが現れてからは彼の希望に従って教会活動からは身を引き、スピーチをする場所と機会を失う。Janieの方はスピーチの才能を町の人々から認められながら、夫Joe Starkがそれを快く思わないことでやはり人前で話す機会を失う。２人とも夫によって自己表現と自己承認の機会を奪われるという経験を共有するのである。

最終場面における２人の生き方の違いは、Janieがたまたま夫を亡くしているのとArvayの夫Jimが生きていることの違いにすぎず、もしJanieの夫が死んでいなかったら、やはりJanieも夫に行動を制限される状況下で彼との関係のありかたに納得する方法を模索していることが予測できる。実際、２番目の夫Joeと険悪な夫婦関係にあった時でもJanieはJoeのことを愛してはいなくても経済的に必要な人であると考え、彼から離れることはない。女性として進歩的にも読めるJanieの生き方と、保守的とも読めるArvayの生き方は、状況次第では類似すると考えられる。つまりArvayはJanieの条件が違った場合の一側面を表象している。Hurstonはこの最後の作品において、突如文学的テーマや女性の生き方に関する考えを変えたわけではなく、人種を超えて共有される普遍的な問題である、結婚における自己承認というテーマを、社会的視野をミニマムに制限されたArvayの生き方によって追究していると考えられるのである。Hurstonは、スクリブナー編集者Burroughs Mitchellへの書簡の中で、“You know yourself that a woman is most powerful when she is weak.”（*Letters* 562）と述べる。変えることができない夫の価値観や結婚生活という制約がある中で自己承認を得ようとするArvayの姿には、あがきとある成長、そしてたくましさを読み取ることができる。

Ⅱ 「母」の子であることと「母」であることと

自分が抱く性役割を押し付け、妻を下に見るように感じられるJimとの関係に悩んだ末にArvayは、彼のわがままをすべて包み込む「母」の役割を担って彼の世話をすることを決意する。それではこの発想のヒントとなった彼女が母として過ごした経験と、彼女と実母の関係はどのような意味を持つのかについて次に考察していく。

まず最初の子供であるEarlの障害をArvayは自分が犯した精神的姦淫の報いととらえ、悲観的な宗教的解釈に傾く。また夫婦によるEarlの育児方針の違いは、ArvayのJimに対する批判的な気持ちを助長する一因となる。動物のようにうなるEarlの欲求や苦しみを理解できな

いままその死によってArvayの母としての役割は終わる。Earlの「母」であることでArvayが経験したことは罪悪感と悲しみ、そしてJimに対する不信感と心の隔たりである。

２番目の子であるAngelineは美しく健康な子であったが、Jimに似ていないことと女の子であるという理由でまたしてもArvayは自己評価を下げる。そしてAngelineの親離れは早い。親から提供される大学教育を受ける機会に対してAngelineは全く価値を見出すことはなく、Hattonを振り向かせ彼と結婚することにしか幸福を感じない。高校の卒業式のためにArvayが準備した短いスカートをAngelineが断固拒否する様子は、親から子ども扱いされることに対する拒絶を象徴する。この時Arvayは子供たちの成長と家族の解体を感じる。AngelineがHattonに対して “So rape me, and I'll help you!”（179）と叫ぶところを聞いてしまったArvayは肝をつぶすが、Angelineの言葉は、彼女がもはや母にそのセクシュアリティーを保護される娘ではなく、自らのセクシュアリティーを武器として異性を獲得する性的に自立した女性であろうとしていることを示唆する。Arvayが母であり続けようと願う半ばで、Angelineは母としてのArvayの役割を終わらせてしまう。しかもAngelineはフロリダの法律で結婚が認められる18歳に満たないというのにどうして両親の立ち会いなしに結婚できたのだろうかといぶかしく思うArvayに対し、JimがArvayには内密でAngelineの結婚に立ち会ったことを話した時には、Jimに対してこぶしを固めるほどの怒りと、母として自分が無視され、必要とされなかったことに激しい疎外感を抱く。ArvayはMeserve家の中で自分だけHensonのままであり、「母」ではなく “handmaiden”（199）のように感じる。この様子は、“She didn't belong where she was, that was it. Jim was a Meserve. Angeline was a Meserve. Kenny was a Meserve, but so far as they were concerned, she was still a Henson. Sort of a handmaiden around the house. She had married a Meserve and borned Meserves, but she was not one of them.”（199）と描かれる。Angelineの親離れと結婚によりArvayは突然に母の役割を喪失するだけでなく、家族の中における存在意義をも見失う。

さらに３番目の子であるKennyの誕生はやっとArvayに安堵をもたらすものの、その妊娠中にJimが女の子はいらないから男の子を産めと言ったことで、Arvayは男の子でなければ離縁されるのではないかとの不安で苦しむことになる。Jimにとっては軽い冗談であったのだが、経済力のないArvayにとっては、子どもの性別次第で自分の妻として母としての地位を失う危機を経験することになる。KennyはArvayにとって望ましい息子ではあったが、家から離れ、ミュージシャンとして生計を立てる決意をする時点では、ArvayよりもJoeを音楽の師匠と考え、親離れを遂げる。Kennyが選んだ恋人Feliciaが、Earlの破滅の原因となり、Arvayの「母」であることの役割の第一の終焉を導いた遠因となったCoregio家の娘であるこ

とはArvayを失望させる。しかしArvayはもう息子の生き方をコントロールすることはできず、失意の中で「母」なる役割を喪失する。またKennyの自立を象徴する大学でのコンサートの場面では、Arvayは音楽の中でEarlの顔や弔いの鐘の音が思い出され、さらにAngelineとHatton、KennyとFeliciaが談笑する様子にも阻害感を抱き、３人の子どもたちの「母」であることの完全な終焉を味わうのである。

このようにArvayの子どもたちに対する「母」としての愛情はいずれもArvayにとって不本意なかたちで遮られ、彼女に不満をもたらしている。ところが「母」であることはこの作品において、Arvayの内面的な資質を共有する手段としても描かれていることも特徴的である。例えばEarlの動物的な叫び声は、ヒステリーの発作を起こして実家の家族やJimに取り押さえられテレピン油を目にこぼされたArvayの病に重なり、[4]むさぼるようにArvayの乳を吸うEarlのエネルギーは、結婚前にJimと関係を持った後にArvayが感じる、Jimを食べてしまいたいくらいに渇望する気持ちを髣髴とさせる。またHattonに“rape me”と言ったAngelineの夫婦関係は、レイプに始まって夫に従うArvayのそれをくりかえすことが示唆されているかのようだ。Meisenhelderも、“The situation for Angeline, who has already been made a ‘seraph’ in her father’s naming of her, promises to be similar.”（Meisenhelder 102）と指摘する。そしてJoeからKennyの音楽の才能はArvay譲りであることを指摘された際にはJoeとKennyの絆に阻害された気持ちが和らいでいる。このようにArvayは「母」であることによって良くも悪くも自分の性質の一部を伝え、それによって絆を認識している。しかしJimとの関係においていくら彼の「母」たる役割を担ったとしてもJimはArvayの内なる資質を共有するわけではなく、二人は類似性を持つわけではない。そこには他者である夫との厳然たる隔たりが存在する。

また、ArvayがJimの価値を積極的に認めるきっかけとなるのが、Arvay自身の母の危篤とSawleyへの帰郷である。主人公が自らの出発点であり原点に立ち返ることで何らかの洞察を得るという文学的モチーフのパターンに当てはまるようにSawleyではArvayにも一つの視野が開かれ、Arvayとその母の関係が読み取れる。夫婦関係に疲れたArvayにとってSawleyの人々は“good and kind”（274）で、故郷は平和、満足、美徳の象徴のように思われる。しかしいざ彼女が帰郷してみるとSawleyの風景や産業は様変わりしており、タクシーの運転手はそこの人々のことをそれほど親切でも善良でもないと言う。さらに姉夫婦の貧しさや卑しさに触れたことで、Arvayが力強さやあこがれを感じた姉とその夫Carlは、かつて思っていたほど自信に溢れた人でもなければ、経済的、道徳的に上位の人間でもなかったことに彼女は気づく。このことが姉と自分の差を作り出したJimの経済力とそれをもたらした彼の努力を再評価する視点をArvayにもたらすのである。Arvayの母は自分にたかろうとするLarraine夫妻よりも

自分を気遣い贈り物を続けるArvayの家族の方に愛を注ぎ、家をArvayに残す意思を伝える。また、母はArvayに、Kennyからの便りと送金を見せ、気遣いのできる親切な子どもを育てたArvayの母としての功績を高く評価してくれるのである。しかし、母の最期を看取り、母の希望通りの葬儀を済ませることができた後に、姉夫婦が中のものをすっかり持ち去ってしまった家を見たArvayはその家を「悪」の象徴であり人を病気にしてしまう家のように感じる。そのため結婚によって早くこの家から離れたことを心底良かったと感じ、もはや自分がそこに属してはいないことを認識したArvayは必要のなくなった母の家を焼く。この行為は、母に守られた子供時代と母の娘であることへの決別を意味する。

Hurston自身はその母の臨終において母の願いをかなえることができなかったことを悔やんだのだが、それと対照的にArvayは母の希望通りに見送ることができ、母の娘であることを完全消化している。貧しいcrakerとしての生涯を送った母がArvayの力で“queen”のように送られたこと、また母がJimとMeverse家の子どもを高く評価したことは、Arvayが背負い続けた劣等意識を解消する。Arvayは母から、crakerとしての劣等感とその解消過程を受け継ぐのである。こうして母のカタルシスを受け継いだArvayは名実ともに母からも故郷からも親離れを遂げるのである。

このようにこの作品において、母と子の関係は、終了するものとして、親離れの物語として描かれている。[5]同時に子供は母の資質の一部を受け継ぎ、それによって物理的精神的に離れてもなお残る絆で結ばれることも示唆されていると言える。Arvayが娘として、また親として体験する「母」という存在は子供という対象に自己を表現する立場なのである。

Ⅲ　Jimの「母」となるArvay

ArvayのJimにたいする気持ちは非常に浮き沈みが激しい。彼女はJimとの結婚生活に悩み、Jimからの支配と抑圧、時には憎しみを感じるかと思えば、Jimを素晴らしい夫だと評価する。Frank G. Slaughterは“Happy and unhappy by turns.”（193）と指摘する。最終的にArvayはJimを横暴だが彼女に甘える少年ととらえ、その「母」のように彼のすべてを受け入れて彼を守る役割を果たしていくという決意によって自己承認を得る。ArvayとJimの関係を検証しつつ、この解決策はどのような意味を持つのかについて考察していく。

ArvayとJimはいずれも深い相互理解と調和を結婚相手に求めているのだが、その方法と意味は互いに思い描くものが違い、決して合致することはない。教会活動に熱心なArvayにプロポーズをするJimは次のように女性観を語る。“Women folks don’t have no mind to make

up nohow. They wasn't made for that. Lady folks were just made to laugh and act loving and kind and have a good man to do for them all he's able, and have him as many boy-children as her figgers he'd like to have, and make him so happy that he's willing to work and fetch in every dad-blamed thing that his wife thinks she would like to have. That's what women are made for"（25）このような性役割をArvayに押し付ける一方でJimは妻や家族に経済的な不自由は一切かけず、弱音を吐くことなく仕事に打ち込むという性役割を果たす点で一貫性があり、彼が抱く性役割に賛同できるパートナーとであれば互恵関係が成り立つ可能性がある。しかし二人の結婚観の違いが象徴的に描かれる最初のシーンが、桑の木の下でのレイプの場面である。Arvayをレイプした後、Jimは彼女に対して "Youse a married woman now."（56）というのに対し、Arvayの方は "All I know is that I been raped"（56）と言い、結婚とはとらえていない。このように大きく乖離した結婚観を抱えながら二人の生活は始まる。Kennyを妊娠中に、Jimが女の子はいらないから男の子を産めと言った言葉にArvayが苦しんだことが分かった時には、Jimは謝るものの、普段の自分の行動を見れば冗談であるとわかるはずだと思い、自らが蒔いた種であるにも関わらず、互いに理解できないArvayとは別れたほうが良いのではないかと考える。また単にArvayからの称賛を得たいがためにJimが不必要に蛇をからかって胴を締め付けられる場面においては、Arvayが自分の望む行動をとれなかったというArvayにとっては全く理不尽な理由でJimはArvayのもとを離れるのである。しかもJimはArvayに、自分にとって望ましい妻になるための1年間の猶予を与えると宣言し、彼と結婚生活を続けるためには、ArvayがJimの押し付ける価値観を受け入れざるを得ない状況が読み取れる。

Arvayが結婚生活において感じる苦痛はいつもJimに見下され、自分が彼の奴隷であるかのように思えることである。例えばJimが大きな金庫を買って家の財産をそこにしまい、Arvayにはその額を明かさない際には、"That made her feel shut out."（130）、"He had never taken her for his equal . . . and looked down on her as the backwoods Cracker."（130）と描かれるように対等な立場ではなく、妻の座から疎外されているように感じ、また自分とJimの関係を "Little David" と "Goliath"（130）のように思う。Earlの静養のためにSawleyに滞在する際には、Arvayは二人の関係が始まった桑の木の下で ". . . she was a slave to that man!"（134）と苛立たしく思うが、ヒマワリが太陽の方を向かざるを得ないようにJimの意向通りに行動し、Earlを母のもとに預けて彼のもとに戻ることになり、おいてきたEarlを心配に思うにつけても、Jimの命令通りにせざるを得ない自分に苛立つ。さらに彼女がEarlの死を悲しみ、喪に服したい気持ちでいる場面では、彼女を慰めようとしたJimからの性的誘惑に屈してしまうことを感

じ取ったArvayは、追悼の意志さえ失わせてしまうJimの力を嫌悪する。この様子は、“She hated the man violently, and she hated him because he had so much power over her.”（157）と表現され、彼女が生き方もセクシュアリティーもJimにコントロールされ、拒否する自由もなく、能動性の余地のない苦しみが表現される。ArvayにとってJimとの結婚生活はひたすら“passive, passive, receptive”（158）であり、それが重荷となっている様子は、“She had worn a shield and buckler for eighteen long years.”（158）と描かれる。

Arvayは夫婦関係における受動性がもたらす無力感に苦しみ続ける。疎外感を抱いたAngelineの結婚に際して、Arvayは“what was real love?”（177）と自問し、愛とは心から信頼して安らげるものであり、互いに所有し合うことだと思うが、Arvayにはそれが叶っていないと思う。Arvayの理想は、“Love to her meant to possess as she was possessed. . . . An eternal refuge and everlasting welcome of heart to rest and rely on.”（177）と表現されるが、彼女は一方的に夫から所有されるだけで自分が能動的に彼を所有しているとは思えないのである。

このように自分のJimに対する従属性に鬱屈しているArvayが、ついに彼の希望に真っ向から反対し、自分の感情的な欲求を爆発させてしまうのがKennyの大学での演奏会でEarlのことを思い出して気分が悪くなり、帰りたいと主張する場面である。しかしArvayが主張したことで、主人の意向に反対する奴隷がそうなるようにArvayは手ひどい罰を受けることになる。Arvayの主張に腹を立てたJimは乱暴な運転で彼女を脅したのち、寝室に閉じ込め、彼女は自分の“property”（216）であると言い、自分の許可なしに考えを述べることも服を着ることも動くこともするなと命令する。また Jimは“Where I made my big mistake was in not starting you off with a good beating just as soon as I married you.”（215）と言い、Arvayを殴ることで調教する必要性を強調する。これらのJimからの圧力によって、Jimが求める二人の関係が、Arvayにとっては白人主人と女奴隷の関係に類似することが明らかになる。ただこの後、“I can't stand this bondage. . . .”（218）と叫んで、死んでも良いからJimから逃れたいと考えるArvayに対し、Jimは子供のようにArvayの胸で眠ってしまい、この出来事の重みが二人にとって全く違うことが読み取れる。

さらにJimにとって文字通り命がけでArvayとの絆を確かめたかったのだが、彼女から満足できる行動を引き出せなかった、蛇に絞め殺されそうになった事件の後、JimはArvayに、自分の希望通りの妻になるための猶予を一年与え、エビ漁の船に練るために彼女から去って行く。この時も “I felt you looking down on me all the time.”（262）と言うArvayと、ずっと彼女を“protect”してきたというJimの話はかみ合わない。JimにとってはArvayのような宗教臭い考え方や控えめな愛し方は物足りず、もっと積極的な愛や行動を求めているのである。

また、Jimは、二人が “the same point of view”（266）を持てないと結婚しているとは言えないと主張するが、これはArvayがJimのpoint of viewを持たされることを意味する。

このようにJimからの抑圧に苦しんだArvayではあるが、同時にJimに対する気持ちはシーソーのように揺れ動き、彼の存在に大きな喜びを感じる様子も描かれる点は注目に値する。このようなArvayの揺れる気持ちには、性役割にこだわる相手と“alternately the happiest people in the world, and the most miserable.”（*Dust Tracks* 749）な気持ちになったというHurston自身の経験が窺える。Jimに求婚されている時点ですでにArvayは彼を軽蔑する気持ちと自分にはもったいないという気持ちを持ち合わせている。またEarlの死を悼んでいる間、JimがFast Maryとじゃれ合っていたのではないかとの疑惑が晴れた時には、ほっとし、彼が夫として変わらず自分のそばにいてくれることを、“This was a miracle right out of the Bible. For some reason, still and as yet not revealed to Arvay, this miracle of a man had married her. She had been blessed beyond all other women of this world.”（168）とまさに “happiest” な気持ちになっている。

さらにArvayのJimに対する評価が決定的に上がり彼女の自己認識が変化するのが、夫婦のいわば冷却期間に母危篤の知らせを受けて故郷に帰るときである。姉夫婦の貧しさとみすぼらしさを知ることで、いかにJimが勤勉に働き、経済的に豊かな暮らしをもたらして彼らと差をつけていたのかをArvayは知るのである。母の葬儀代を出せない姉に対して、Arvayはかつて死んででも逃れたいと思ったJimのことを、“I got a husband!”（284）として言及する。この文脈においてhusbandとは稼いでくれて生活に必要な金銭を提供する役割を意味する。この言葉はJimと違って経済的に頼りにならない姉の夫Carlをむっとさせるが、Carlと比較することによりArvayはJimがいかに苦労を見せることなく稼ぎ続けてきたかと実感するのである。このようにArvayの帰郷は、Jimの経済的貢献という形の愛をあらわにする役割を果たしている。Earlを静養させるために帰郷した際にも、Earlや母の生活費を送ってくれたのはJimであり、Arvayから離れてエビ漁へと去って行った後にも、Jimは毎週Arvayの生活費を仕送りしており、彼女に経済的な不安を与えることは一度もない。

またArvayがかつてあこがれたCarlは、彼女から金をゆすり取ろうとして失敗するのだが、その経済的にも倫理的にも落ちぶれた姿やみじめな姉の生活を見たことで、Arvayはかつて自分よりも優れていると思われた人々が実はそうではなく、今や自分に頼ってくる愚かで弱弱しい存在であることを実感する。このことはArvayの劣等感を解消するとともに、自分は姉やSawleyの人々とは階級を画した中流階級に属するようになったことと、HensonではなくMeserveの人間になりきっていることを実感させる。この様子は母の家の近所に住むHessie

から、Arvayは姉一家の親族に見えないと言われる場面において象徴される。Sawleyの人々や姉一家よりも経済的に上位の立場になることを可能としたJimの力をArvayが高く評価した時点で、JimがArvayに要求したことは “burden”（298）とは思えなくなるのである。Arvayのために働き稼いだというJimの貢献が可視化されたことで、ArvayはJimにとって一方的な奴隷ではなかったことと夫婦間の互恵的な奉仕の存在に気づくことができるのである。さらに彼女は生活の流儀においても気づかぬうちにSawleyのやり方ではなくJimのやり方を好むようになった自分に気づく。またJimがかつてArvayを臆病な愛し方しかできないといったことは正しいと思う。これによりArvayの “point of view”は一気にJimのそれを同じになり、また強そうに見える人間が弱さを抱えている可能性を察する視点をも彼女は身に付けるのである。

その後エビ漁の船にいるJimのもとに行くArvayにとってJimは最高の価値を持つ存在となる。Jimの船の様子を見たArvayは、“I know that I got the smartest husband in the world.”（323）と手放しで誉める。またJimがArvayに大西洋の朝日を見せたいがために、嵐の中、危険な浅瀬の中で無理に船を進める際には、彼を止めようとしてJimの足にしがみつく船員にArvayは怒った熊のようにとびかかり、Jimから船員を引き離す。この場面は、Jimが蛇から絞められた際にArvayが身動きできず、彼を助けることができなかった場面と対照をなして描かれる。危険な舵取りの後、大西洋の素晴らしい朝日を見せてくれたJimに対してArvayは、“I'm so proud you brought me with you.”（330）、“you're the boldest and the noblest man”（331）と言って心から最大限の称賛と感謝を惜しまない。自分たちだけでなく船員の命の危険を冒してまで急いで船を進める必要はないというのがJimを止めた船員とかつて蛇に絞められたJimを見た時のArvayの価値観であるのだが、Arvayはその価値観から脱し、Jimの気持ちを理解し、その行動を全力で応援する妻へと様変わりを遂げている。この様子は、広々した海に太陽の光が広がっていく場面描写と重ねて、“She felt herself stretching and extending with her surroundings.”（331）と描かれ、Hurston文学において個人の世界観の広がりを表わす “horizon”の広がりをArvayは感じる。またこの場面におけるArvayの晴れやかな気持ちは、*Their Eyes Were Watching God*の最終場面において、Janieが性役割にとらわれ続ける夫たちから脱して、自分の “horizon”を広げ、一人で人生を歩み始めた際に感じる人間的成長とすがすがしさにちょうど重なり合う点は印象的である。Janieは夫たちの価値観から脱して一人で歩み始め、Arvayは夫の価値観を完全に受け入れて結婚生活に戻るという対照性がありながら二つの作品の結末は類似性を持つ。この結末についてMeisenhelderは “Hurston at the end of the novel emphasizes not only Arvay's victimization by Jim but also her

internalization of his values."（112）と、HemenwayはHursonが半悲劇としてArvayの決断を描いた可能性があるといずれもArvayの今後に対する閉塞感を見ているが、JanieとArvayという一見対照的な女性に共通することはいずれもパートナーとの幸福の在り方を追求する人生の旅の途上にあることだ。一人であるJanieは今後懲りることなく新たな異性のパートナーを求める意欲を持ち、新たな価値観に出会うたびに "horizon"が広がることを予見している。ArvayもJanieも、最終場面ではそれぞれ偽りのない "horizon"の広がりを経験していると言える。

またArvayのSawleyへの帰郷のもう一つの重要な意味は、彼女が自分よりも力があると思っていた人々が実は弱かったことと、人間の多面性を知ったことであり、この経験がそれまで自分に対して圧倒的な力を持つと考えられたJimを理解する方法に結びつく。彼女は時に自分を傷つけ手に負えないJimを、"Inside he（Jim）was nothing but a little boy to take care of. . . ."（351）ととらえ、自分の存在意義を、"Her job was mothering."（351）とする発想に至る。Arvayはかつて自分がJimの奴隷のように思えた。だが、Jimも労働という対価でArvayに貢献していることを認識し、また、たとえ奴隷のようにJimの気まぐれに振り回されていたとしても「母」の位置にいることで彼よりも上の立場となり、奴隷とは差別化できることを認識することで、Arvayは彼との生活における自分の役割に尊厳を見出すことができるのである。Jimと一緒に生活していくことを決意するArvayの生き方そのものは変わらないのだが、その生き方のとらえ方が大きく変わったことになる。Jimの「母」という役割に目覚めたことで、Arvayは彼に虐げられる弱者や奴隷の認識から脱し、Jimの横暴を許し、彼を包み込む愛によって、彼の上位の立場から彼に接するという生き方と折り合いをつけ、自己承認を得るのである。Hurstonは編集者のBurrough Mitchellへの手紙の中で、"You know yourself that a woman is most powerful when she is weak."（*Letters* 562）と述べている。限られた条件の下で、Arvayが「母」という生き方の発想へと至るプロセスには、彼女の模索と強い自己承認欲求が表れている。

さらに、この作品において「母」であるという状況は、Arvayと子供たち、Arvayと母、との関係においても明らかなように、一貫して永遠に続く役割ではないことと、子供たちがそこから親離れしていく場面として描かれていることは意味深い。するとArvayのJimに対する「母」の役割も永続的なものではないことが示唆され、また、Arvayの自己承認の対象探求は続いていく可能性が読み取れる。Arvayもまたパートナーとの愛を求める旅の途中にあり、そうであっても彼女が経験した価値観の変化には価値があるのだというメッセージが、Arvayが見た太陽の光の広がりと、"horizon"の広がりによって示唆されるのである。

結び

Arvayが発想するに至った「母」の役割を果たすという自己認識は、Jimの性差別や価値観を変えることができない条件下で、彼と対等か自分が上位になって自分の尊厳を保つために必要なものである。いわば反抗的な息子をうまく転がしてコントロールする「母」の位置を、Jimとの人生における落としどころとするArvayの模索の苦労が描かれ、この作品は一人のパートナーと長く良好な関係を結ぶことの普遍的な困難さをメッセージとする作品とも読める。またさらに広い視点でとらえてみると、自分に与えられた変えることができない社会や現実のもとで、苦心して自己実現を図ろうとする人間心理と探求心を読み取ることもできる。

この作品における「母」と「子」の関係は、子供が母から親離れを遂げていくものの、子は母が自分の資質の一部を伝え自分を表現していく手段にもなっている。するとJimの「母」になろうとするArvayの決断は、相手に自分の資質を伝え、共有しようとする自己承認の試みの一つとも考えられる。さらに「母」のようにJimを守ろうとするArvayの献身はタイトルのseraphと相まって聖母マリアを連想させ、Jimが嫌ったArvayの原点である宗教性は一貫して変わらないまま、Jimの物質的、現実的、本能的な欲求や生き方と対立することなく調和し、融合し合うのである。タイトルのseraphが備える宗教性はArvayの自己承認の戦略を象徴し、彼女の変わらぬ気質、夫によって抑圧されることのない本質を表わすのである。Arvayにとって「母」になることはこのように自己の本質を守る戦略であると同時に、変えることができない環境や条件下での自己承認の試みと言えよう。

註

1．Anna LilliosによるとHurstonのハリウッド映画への情熱は以下のように説明される。“Hurston had Hollywood aspirations and may have been impressed by the fact that Rawlings's The Yearling was being filmed in central Florida in the mid-1940s.”（Lillios 33）

2．例えばAnna Lilliosは、“. . . the novel can be seen as advocating a new way of looking at race, class, and gender in the South.”（Lillios 164）と述べ、Hurstonの文学的関心やテーマが変ったわけではないことを指摘している。

3．Janet St. Clairは “Seraph on the Suwanee, the story of Arvay's reconciliation of personal conviction and social realities, may have been Hurston's own deliberate but uncertain attempt at a similar reconciliation.” と述べ、Hurstonの体験が反映されている様子を読みとっている。（Clair 211）

4．このArvayの発作については、Hurstonの1926年の短編作品である “The Eatonville Anthology.”においてテレピン油で妻の発作を抑えるというこの作品における状況とほぼ同じエピソードが描かれている。Arvayが白人である蓋然性のなさも読み取れる。

5．Gregory Phippsは、“Importantly, in many of Hurston's works . . . direct filial lines between mothers and daughters . . . .”（Phipps 216）と指摘する。

参考文献

Birch, Eva Lennox. *Black American Women's Writing*. Routledge, 2014.

Clair, Janet St. "The Courageous Undertow of Zora Neale Hurston's *Seraph on the Suwanee*." *Critical Essays on Zora Neale Hurston*, edited by Gloria L. Cronin, G.K.Hall, 1998. pp.197-212.

Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston: A Literary Biography*. University of Illinois Press, 1980.

Hurston, Zora Neale. *Zora Neale Hurston: A Life in Letters*. edited by Carla Kaplan, Doubleday, 2002.

-----. "Dust Tracks on a Road." *Hurston: Folklore, Memoirs, and Other Writings*, edited by Cheryl A. Wall, The Library of America, 1995, pp.561-769.

-----. *Seraph on the Suwanee*. Harper Perennial, 2008.

-----. *Their Eyes Were Watching God*. Harper Collins, 2010.

Li, Stephanie. *Zora Neale Hurston: A Life in American History*. ABC-CLIO, 2020.

Lillios, Anna. *Crossing the Creek: The Literary Friendship of Zora Neale Hurston and Marjorie Kinna Rawlings*. UP of Florida, 2010.

Meisenhelder, Susan Edwards. *Hitting a Straight Lick with a Crooked Stick*. U of Alabama P, 1999.

Phipps, Gregory. *Narratives of African American Women's Literary Pragmatism and Creative Democracy*. Palgrave Macmillan, 2018.

志水智子 「母」になることのないストーリー・テラー―*Their Eyes Were Watching God*についての考察―、Asphodel 57号（同志社女子大英語英文学会）、2022、pp23-39.